

# 図書館だより

柏崎常盤高等学校図書館 12月号

令和5年12月5日発行



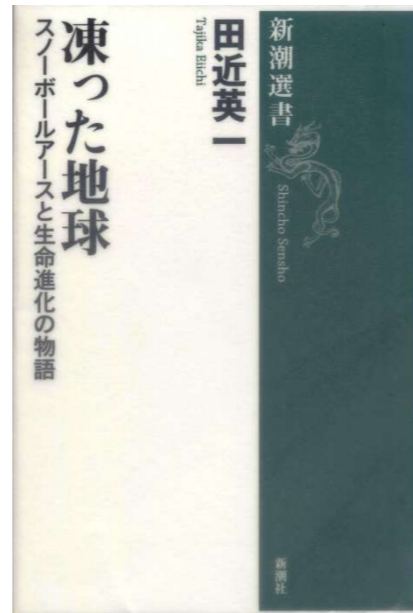
## 新任の先生方のおすすめ本の紹介

★伊藤 幸一 先生のおすすめ本

『凍った地球～スノーボールアースと生命進化の物語～』 田近 英一/著 新潮選書

「スノーボールアース」という言葉を聞いたことがあるだろうか。日本語名称は「全球凍結」、地球全体が海氷や氷床に覆われてしまった現象を指す。「生物」の教科書には『約22億年前に1回と7～6億年前に2回の計3回あった。』とある。全球凍結という現象はなぜ起こり、どのような仕組みで終わったのか、始原生物の出現が40億年前とすると、全球凍結時の生物はいかにして生き抜き、進化していったのか、といった疑問が、読み進むうちに氷解してゆく。何より印象深く思うのは、地球を丸ごと一つのシステムとして捉える視点であり、研究の展開の様子である。

本書を読むことによって、地球を丸ごと捉える視点や地球環境変動と生物との絡みを捉える視点等が与えられ、それはひいては、現代の地球温暖化という環境変動をも、新たな目線で捉えることのできるような感覚を醸成することに繋がるように思う。是非、『凍った地球』を読んでみよう！



★柘淵 直樹 先生のおすすめ本

『日本霊異記 新 日本古典文学大系 30』 出雲路 修/校注 岩波書店

図書委員の生徒から推薦図書の依頼を受け、図書室を訪問してみることにした。

図書室のある3階までの道のりは遠い。険しい階段を一步一步登る。照明が弱いのか、3階の廊下は薄暗い。ようやく図書室の入口に到着した。ドアは左右に開く構造になっているようだ。いったいどんな部屋なのだろうか。ためらいを感じつつも把手に指をかけた。

ドアを開けると、爽やかな風が頬を撫でた。意外と明るい部屋だと感じた。思いきって一歩足を踏み入ると、そこは凛とした荘厳な空間。きれいに並べられた机や椅子があり、奥にある書架には人類の叡智が眠っている。

何かに導かれて自然に足が動く。書架番号8番の通路に引き寄せられる。通路から少し入ったところの左側に、形容しがたいオーラを発する1冊の書物があつた。自然に手が動き、1冊の本を取り出した。天から声が降ってきた。「コレヲ読メ。」

その本には日本霊異記と書かれていた。



## 冬休み特別貸出しのお知らせ

期間:12月11日(月)～12月22日(金)

返却日:令和6年1月9日(火)

冊数:無制限!

♡ 人権に関する本から 1学年図書委員のおすすめの本です ♡

★1年1組 図書委員のおすすめ本

『健康で文化的な最低限度の生活』 柏木 ハルコ/著 小学館

僕がおすすめする本は『健康で文化的な最低限度の生活』です。この本は新人ケースワーカーの目を通して、生活保護のリアルに迫る青春群像劇です。生活保護を受けることができる条件や、生活保護の仕組みなどを知ることができます。また、生活保護受給者の生活もリアルに描かれていて、そこもこの作品の魅力だと思います。この本は漫画なので、本を読むのが苦手な人でも楽しめて、簡単に生活保護について学ぶことができると思うので、ぜひ見てみてください。



コミック

★1年1組 図書委員のおすすめ本

『消えていく家族の顔～現役ヘルパーが描く認知症患者の生活～』

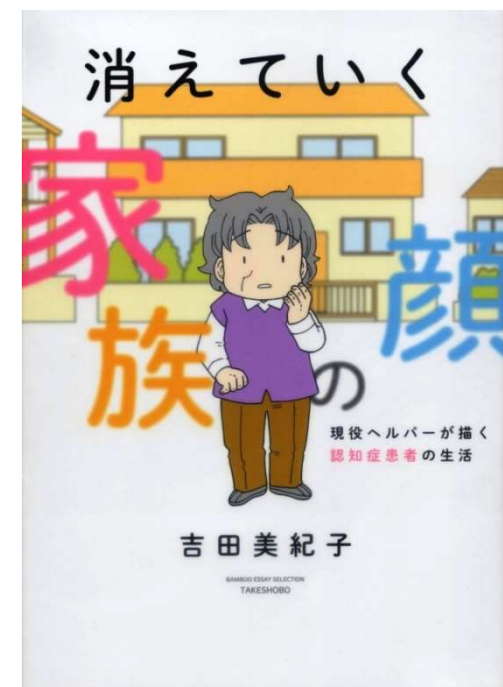
吉田 美紀子/著 竹書房

今回僕が紹介する本は、『消えていく家族の顔』という本です。この本は現役ヘルパーさんが描く認知症患者の生活というものです。

まず認知症とは簡単に説明すると、様々な原因で記憶や思考などの認知機能が低下し、日常生活や社会生活に支障をきたすことをいいます。そして、この本は認知症の症状のレベルによってどんな症状があるかがマンガで分かりやすく描かれています。

そして認知症と言っても、いろいろな症状があります。例えば、散歩をしていて来た道が分からなくなったり、買い物中に何をかうのか忘れてたり、日常生活に支障をきたすものもあります。時に、自分の子どもの顔を忘れ、その顔がバケモノに見えてしまい、暴力をふるってしまうこともあります。

このように、認知症には様々な症状があり、それを知るためにも、是非この本を読んでみてください。





★1年2組 図書委員のおすすめ本  
『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』  
汐見 夏衛/著 スターツ出版文庫

平和な現代の日本に生きる私たちには縁遠い戦争。大切な人との日常を戦争によって奪われた人は数多くいたはずです。

この作品は、若き特攻隊員と少女の話ですが、その少女が現代の中学生という所がポイントとなっています。戦争の結末を知っていながらも、伝えることのできないもどかしさや、戦争中を生き延びた人々の様子をその少女の目線で感じることができます。

戦争を忘れないためにも、命の尊さを感じるためにも、一度読んでみてはいかがでしょうか。



●『続 窓ぎわのトットちゃん』 黒柳徹子/著 講談社

1981年に刊行された『窓ぎわのトットちゃん』は、国内で800万部、世界で2500万部を超える大ベストセラーのエッセイで、本書は42年ぶりに刊行された続編だ。

続編を望む声は多くあったが、著者は前作を超えるものは書けないと思い、断っていたという。著者のその気持ちを変えたのはウクライナでの戦争だった。戦争というものがどんなに悲惨なものかを、体験者として書き残しておくべきだと。

しかし、本書の内容は戦中の厳しい状況ばかりではない。戦前の豊かな暮らし、戦後に芸能界で活躍する様子など、著者の独特な物の見方やとっぴな言動はユーモラスで楽しい。

小学校1年で退学になり、その後入学した「トモエ学園」での体験を綴った前作も合わせて読んで欲しい。



★1年2組 図書委員のおすすめ本  
『流浪の月』 凧良 ゆう/著 東京創元社



10歳の少女、家内更紗は、幼い頃父親が病気で亡くなった事に、家庭が崩壊してしまう。その後、伯母に引き取られたが様々な理由から家に帰ることをためらい、放課後は公園で一人残り過ごしていた。そこで当時大学生だった文に出会う。

文は更紗の事情を察して彼女を自分の家に招き入れた。更紗は文の家で、伯母の家で暮らしていた時とは打って変わり、心安らかな時を過ごしていた。しかし、その幸せは長く続かず、文は誘拐犯として逮捕されてしまい二人は離れ離れになってしまった。

15年後、二人は再会し、周りを巻き込みながら運命が動き始める。

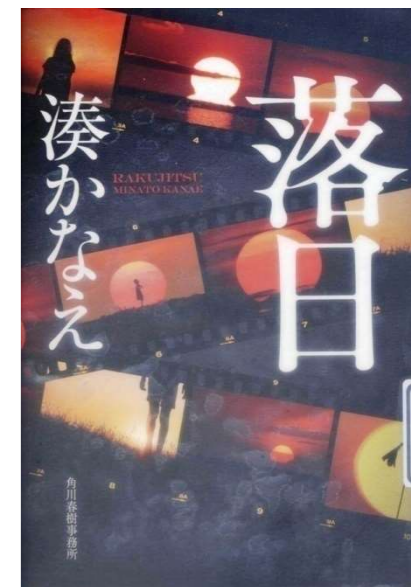
私はこの本を読んで、刑務所で刑を終えて出所した人への差別に大きな衝撃を受けました。この本では、出所した後もなお、ネット上への現在の写真の拡散、人権を侵害する言動が記されており、読者はこの人権問題を考えさせられます。私もこの本をきっかけに様々な人権問題を考えるようになりました。

●『落日』 湊 かなえ/著 ハルキ文庫

主人公は二人いる。一人は脚本家の甲斐真尋。師匠である大島凜子は恋愛ドラマの脚本でヒットを連発したが最近仕事は減っており、当然真尋も世に出るチャンスがなかなか無い。そんな彼女に連絡をよこし、協力を求めてきたのがもう一人の主人公、長谷部香だ。初監督作「一時間前」で国際的な評価を得た新鋭映画監督である。香は幼い頃に一時期、真尋の故郷、笹塚町に住んでいた。次作の題材として、かつてこの町で起きた一家殺害事件を取り上げようと考えており、当時の現地を知る真尋に連絡してきたのだ。

事件について調べていくうちに明らかになる意外な真実。一人の人物についての全く異なる見方。しかし、そのどれもが真実なのだ。人は多面的で複雑な存在であり、それは時に想像を超える。

殺人、いじめ、事故、虐待、自殺という内容のわりに読後感が重くないのは、それらが全て過去の出来事として描かれていることと、著者が最後に仕掛けた小さな希望のせいかもしれない。



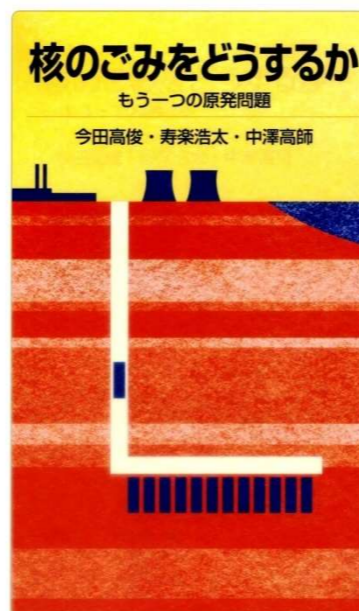
新着図書を紹介

●『傲慢と善良』 辻村深月/著 朝日文庫

婚活アプリで知り合った婚約者の坂庭真実が忽然と姿を消した。主人公の西澤架(かける)は、その行方を探して彼女の「過去」と向き合うことになる。彼女の両親、姉、元同僚、同級生、見合い相手、結婚相談所の老婦人など、彼女と関わりのあった人々と会い、話を聞くことで、それまで知らなかった婚約者の実像が浮かび上がってくる。

人生の重大な選択の一つである配偶者の選択。「結婚する・しない」や、どのようなスタイルを選ぶのかも含め、その選択次第で、人生は大きく変わってしまうかもしれない。だからこそ人は悩み、迷う。

何かを選ぶということは、何かを捨てるということでもある。その逡巡と決断のあれこれがリアルで面白い。恋愛ミステリーの形を取っていながら、人間ドラマが濃い。将来結婚しようと思っている人は読んでおいた方がいいかも。



●『核のごみをどうするか もう一つの原発問題』  
今田 高俊・寿楽 浩太・中澤 高師/著 岩波ジュニア新書

原子力発電によって生じる高レベル放射性廃棄物、放射能の影響が弱まるまで長い年月を要するこの「核のごみ」をどのような方法で処分すればよいのか。安全神話を作り上げ、先送りしてきた解決困難なこの問題。災害が多発するこの国で、安全に処分することなどできるのか。果たして私たちはこの問題とどう向き合えばよいのか。専門家らによる提言を読み解きながら問題解決への道を探る。

**冬休み中は図書館を終日閉館します！  
返却は返却BOXにお願いします。**